

平成三十一年度 お茶の水女子大学 文教育学部 第三年次編入学試験問題

言語文化学科(日本語・日本文学プログラム)

※解答はすべて答案用紙に記入すること。  
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

贈答歌へのこだわり、あるいは場や折に即した巧みな表現への志向が兼好に見られるとするならば、それは『徒然草』と、関わりどころがありはしないか。なかなか正体を見せぬこの作品の、創作意識を探るヒントとならないだろうか。

例えば『徒然草』第一三七段。「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」というあまりにも著名な警句に始まるこの章段の、発想の原点に接近してみたい。

花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほあはれに、なさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の事書ことがきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「障ることありて、まからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れることなかは。「この枝かの枝散りにけり。今は見どころなし」などは言ふぬる。

和歌の「事書」が例示されていることに気をつけておきたい。本段の発想や叙述が、和歌と深く関わることの証左である。中でも、「歌の事書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも……なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れることなかは。」の部分、また、「ことに頑なる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見どころなし」などは言ふぬる。」に注目してみたい。それは、『兼好法師集』の次の贈答との関係を考えるからである。

神無月のころ、初瀬にまうで侍しに、入道大納言「紅葉折りて来」と仰せられしかば、めでたき枝に檜原折ひばらりかざして持たせられたれど、道すがらみな散り過ぎたるを奉るとて

世にしらず見えし梢は初瀬山君にかたらむ言の葉もなし (兼好法師集・一〇六) 返し

こもりえの初瀬の檜原折りそふる紅葉にまさる君が言の葉 (同・一〇七)  
神無月のころ、兼好は長谷寺に参詣する機会を得た。この時「入道大納言」すなわち兼好の師二条為世ふたじょうの発言は、弟子への一種のテストではなかったろうか。当然紅葉に歌を添え、土産にすることが求められていた、と想像される。兼好はまず、歌枕「初瀬」に関わり深い景物である檜原と紅葉を抱き合わせる趣向を考えついた。その趣向を具体的に表す土産をこしらえたうえで、おそらくそれに見合う和歌を詠んだ。しかしせっかくのアイディアも台無しになってしまふ。そこで、窮余の一策、新たに和歌を作り直す。結局、二条為世から称賛の和歌を与えられたのである。

「世にしらず……」「こもりえの……」の贈答の背景をもう少し探ってみよう。初瀬山の紅葉は、古く『万葉集』に歌われている(巻八・一五八三・坂上郎女)。この歌は、こもりえのはつせの山はいろづきぬしぐれのあめはふりにけらしも

と『続古今集』に入集している。さらに、一首を本歌取りした、源通親の正治初度百首歌、

こもりえのすぎのみどりはかはらねどはつせの山はいろづきにけり

も『続後撰集』に採歌されている。鎌倉時代に関心が高まっているのである。<sup>3)</sup> 坂上郎女の万葉歌への注目と初瀬の紅葉への関心は、連動しているように見えてよいだろう。先ほどテストと述べたが、為世はこうした和歌史の状況をふまえ、兼好がどうという和歌を詠むか試したのではなかったろうか。そして、初瀬の常緑樹と紅葉を対比する通親の歌の発想などは、兼好の土産の着想に影響を与えた可能性もある。また初瀬の檜原の方は、

まきもくのひばらのいまだくもらねば小松が原にあは雪ぞふる

の形で『新古今集』に取られた、『万葉集』(巻十・二二二四・作者未詳)由来の歌で著名である。兼好は、通親の歌などにも助けられつつ、檜原の中の紅葉を詠むことで、右の二つの古代の歌を抱き合わせにする工夫を思いついたのだろう。たしかに中世歌人の関心に即した趣向ではあるが、もしこれがうまくいったとしても、特記するほどのない座興で終わっていたかもしれない。むしろアクシデントがありながらも、窮地を好機に変える逆転の発想を見せたからこそ、為世は称賛したのだといえよう。『徒然草』第一三七段の言葉を利用すれば、「この枝散りにけり」と見捨ててしまうような「頑な」さに縛られず、「紅葉を折りけるに、はやく散り過ぎにければ」などという状況でもあるかのように歌を詠もうとしたことになる。といっても必ずしも、この為世との贈答が第一三七段を生み出す原因になった、と決めつけたいわけではない。こういう体験が積み重なって、<sup>4)</sup> 表現に対するある種の確信を兼好の内部に育てたのではないか、その確信こそ、『徒然草』の発想や筆法を生み出したものと密接につながるのではないか、と思うからなのである。

『兼好法師集』一〇六・一〇七番の贈答と、『徒然草』第一三七段には共通する発想がある。確かにこの世は不定であり、無常である。しかし不定であり、無常であるからこそ、表現のチャンスが生まれる、という発想である。無常こそが新たな着想や表現を生み出す契機になるという、いわば実践的無常観とも呼びたくなる思想を、ここに垣間見てみたのである。およそ優れた表現には、確信に基づいたモチーフが不可欠である。明確な主題として論理化されていなくてもよい。むしろ感覚や情念に根ざすものであることの方が重要である。こういうようなことに違いない、という確信がなければ、力のある文章は綴れまい。まして、第一三七段の、何かが憑依したとき断案に満ちた文体は実現できないだろう。無常こそ表現の母胎という、和歌の贈答などで培った確信を、『徒然草』を書き綴る兼好の原動力の一つに想定してみたい。

『徒然草』第一三七段と『兼好法師集』との関わりは、他の贈答歌にもうかがえる。例えば、

すべて月花をば、さのみ目にて見るものは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨ねやのうちながらも思へるこそ、たのもしうをかしけれ。

の辺りの言説には、

八月十五夜、報恩寺にて、人々あまた歌詠むよし聞き侍しを、わづらふことありて、えまから申つかはし侍し

月にくき身を秋霧のへだてにもさはらでかよふ心とをしれ

(兼好法師集・二九)

返し

小倉の大納言実教卿

もろともにながめせまし秋霧のへだつる夜半の月は恨めし

(同・三〇)

の贈答歌と接するところがあると思われる。「わづらふことありて、えまからで」などは

また、第一三七段冒頭近くの、「障ることありて、まからで」など、花見の際の事書の例ではあるが、表現としても重なっている。ここで兼好が「たのもしう」という語を用いていることに注目したい。<sup>6</sup> いったい何が「頼もし」なのか。一般には、直接に目にしないことから、かえって興味が尽きず、期待が持たれる状態、とされることが多い。この解釈自体に異論があるわけではない。ただし、月・花を想像力で味わう豊かさといった、個人の心理に閉じ込めてしまつてよいか、どうか。

右の『兼好法師集』の贈答を参照したい。兼好の和歌は、「飽き」を掛けるなど「秋霧」の使い方が巧みである。名月の歌を詠めなかつた口惜しさを、歌で晴らしたともいえようか。実教からも懇切な返歌がもたらされた。月見歌会に参加できなかったことが、かえつて満足のいく歌の贈答をもたらした。見えない月を慕うこととは、良き人との人間関係ははぐくみ、新たな和歌を作り出す契機となる。「さのみ目にて見る物かは」という断定口調にあふれる自信は、そういう体験が積み重なつて至り着いたものではないか。目には直接見えない事柄のはらむ、他者へと開かれた現実の可能性の大きさこそ、「頼もし」というときの内実だと思われるのである。

小倉実教といえ、『兼好法師集』には別の贈答歌が残されている。

祭の日、しのびてまかり過ぎ侍しに、小倉の大納言殿の車より使のあれば

しのびつつ出でつる道にあふひ草君見るべしと思ひかけきや  
（兼好法師集・一〇）  
返し

わが頼む神のしるべにあふひ草思ひかけずといかが思はむ

（同・一一）

賀茂祭の日、たまたまの遭遇に興じる二人の親密さをうかがわせるやりとりである。さて、となるとこれもまた第一三七段との関わりが想定される。はやく閑寿『徒然草集説』（元禄十四年刊）などでも指摘されている関係である。

何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明け放れぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、「それか、かれか」など思ひ寄すれば、牛飼、下部などの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくも、さまざまに行き交ふ、見るもつれづれならず。

に始まる、第一三七段後半部分である。「よき人」と「片田舎の人」との祭見物の様が対照的に語られた後の箇所、知人の忍び車を発見するなど、見物人を見物する面白さをいう。確かに一〇・一一番の贈答に重なる点がある。この後、祭の後の寂しさに「世のためし」を思い、

かの棧敷の前をこころ行き交ふ人の、見知れるがあまたあるにて思へば、世の人数もさのみは多からぬにこそ。此の人みな失せなむのち、我が身死ぬべきに定まりたりとも、ほどなく待ち付けぬべし。

と続ける。「かの棧敷……あまたある」も、この贈答歌の状況に通じるものがある。見あらかず主体が相手から自分へと逆転しているとはいへ、有力な文化人との偶然の出会いがもたらした風雅なやりとりの思い出が、この行文の底にあることは明らかである。問うべきは、両者がどう結び合っているか、であろう。

もとより、ただ葵祭りでの知人との遭遇という話題だけが『徒然草』に提供されている、と見ることもできるし、そのくらいに留めておくのが穏当なのかもしれない。だから深読みと誇られることを覚悟したうえで、直後の、無常を表白する箇所との関連を考えてみたいと思う。

この箇所以降、大きな器から滴る水もやがて尽きる、葬するものもいつかは葬される、

継子立て、と死の不可避性を立て続いて例証してゆくことになるのだから、「かの棧敷の……」は、その例示のトップバッターの役割を負っている。それにしても、唐突感是否めまい。葵祭りから無常へと、主題を転換したいという意図に逸るあまり、いささか形式論理が先行しているのではないか、という印象もないではない。

もとより兼好もそう読まれる危険性は察知していただろう。そこで、ある共通イメージを積み重ねることで、論旨の屈折や飛躍を、文章表現の効果によって目立たなくしようとしているかに見える。そのイメージとは、群集を隠れ蓑にしようとすることや、集団の中に自ら埋没して安逸を貪ろうとする振舞いへの、否定的イメージである。振り返れば、「花は盛りに……」という提言も、誰もが認める、決まり切った美の定型に安住しようとする怠惰な精神への大胆な挑発であった。定型・類型への盲信に疑問を呈することも、群れへの埋没を否定的に捉えるイメージに、連続しているといつてよいだろう。あたかも、和歌の縁語が相互に無関係な景物や心情に必然性を与えて連結するように、このイメージは、散乱しかねない論旨に、統一感を与えているのである。

今問題にしている部分における、忍び車や群集に知人を発見することも、集団への埋没の否定という点において、ゆるやかではあるがイメージが共通するように仕組まれている。しかしそれは、文章表現の技術のレベルの話であって、作者の執筆動機に関わる、事柄への確信に届くほどのことではない。イメージや形式論理は、他者に向けて述べるための道具立てにとどまる。一見無関係に見える知人との遭遇と無常との二者が、確かにつながるのだという思いが、兼好自身にあったのかどうか、である。

結論から言えば、あったのだと思う。作者はこの章段の後文で、「思ひかけぬは死期なり」などと、死の到来の突然であることを強調している。人間の意志や予想を越えた突発性こそ、無常を無常たらしめる実質だと捉えていたといつてよいだろう。だとすれば、知り合いと雑踏でたまたま出会うことも、偶然性という点において、無常と連なる。そして出合いは、新たな人間関係や表現を生み出す契機となる。意志や予想を越えることの、それは肯定的な側面である。作者は、無常を正負両面から捉えている。捉えているというより、両義的であるからこそ無常に魅入られている。出合いや発見は死と表裏一体であるという確信が、彼の筆の原動力の一つなのではないだろうか。「かの棧敷の……」以下の展開は、作者の中では、十分に自然なものだったと思われるのである。

(渡部泰明『徒然草』と兼好法師集』『中世和歌史論』による)

問一 傍線(1)を、必要な語句を補ってわかりやすく現代語訳せよ。

問二 傍線(2)「二条為世」とあるが、和歌の二条派について、江戸時代までを見通して説明せよ。

問三 傍線(3)「弟子への一種のテスト」とあるが、為世のどのような課題に対し、兼好がどのように答えたのか、説明せよ。

問四 傍線(4)にある「坂上郎女」について、知るところを述べよ。

問五 傍線(5)「表現に対するある種の確信」とあるが、筆者によれば、『兼好法師集』を通してわかる、『徒然草』第一三七段「花は盛りに……」を成り立たせる「確信」とはどのようなことであるか、説明せよ。

問六 傍線(6)「いったい何が「頼もし」なのか」とあるが、これに対する筆者の考え

を、通説と比較しながら説明せよ。

問七 傍線(7)「いささか形式論理が先行している」とあるが、『徒然草』第一三七段の「かの棧敷の……待ち付けぬべし。」の箇所には、どのような論理展開があるか、説明せよ。

問八 傍線(8)「文章表現の技術のレベルの話」とあるが、ここではどのような表現上の技術があるというのか、筆者の考えを説明せよ。

(問題以上。解答はすべて答案用紙に記入のこと。)

平成31年度 お茶の水女子大学文教育学部 第3年次編入学試験問題

言語文化学科(中国語圏言語文化プログラム)

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承ください。

\* 氰化鉀：青酸カリ

(王蒙「雄辯症」より)

1. 下線部(1)を日本語に訳せ。
2. 下線部(2)を中国語に訳せ。
3. 下線部(3)を日本語に訳せ。
4. 「病人」はなぜ下線部(4)と言ったのか説明せよ。
5. 波線部(あ)～(こ)を、漢字はピンインに、ピンインは漢字に直せ。

II 次の文章を現代日本語に訳せ。

鄭有郷校、郷校之士、非論執政、然明欲毀郷校、子産曰、何以毀為、夫人朝夕退而遊焉、以議執政之善否、其所善者、吾則行之、其所否者、吾則改之、若之何其毀也、我聞忠善以損怨、不聞立威以防怨、防怨猶防水也、大決所犯、傷人必多、吾弗克救也、不如小決使導之、不如吾聞而藥之、  
(『孔子家語』による)

(注) 鄭——春秋時代の国名。 郷校——郷(行政区画の一つ)の学校。

非論——非難する。 然明・子産——人名。ともに鄭の政治を担った。

退——勤めを終えて帰る。 損——減らす。 大決——大氾濫。

III 次の事項について知るところを記せ。

(1) 六経 (2) 六書 (3) 『隋書』経籍志 (4) 押韻 (5) 『芸文類聚』

平成31年度 お茶の水女子大学 文教育学部 第3年次編入学試験問題  
言語文化学科(英語圏言語文化プログラム)

1 次の英文を読み、設問に答えなさい。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承ください。



(Adapted from Tim Peake, *Ask an Astronaut*, 2017)

設問 1 下線部(1)を和訳しなさい。

設問 2 下線部(2)を和訳しなさい。

○ ○

2 次の英文を読み、設問に答えなさい。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

(Adapted from Richard Roberts and Roger Kreuz, *Becoming Fluent:  
How Cognitive Science Can Help Adults Learn a Foreign Language*, 2016)

設問1 ( a ) ~ ( d ) のそれぞれに入る最も適切な語句を以下から選び、解答欄に書きなさい。

After all, At first, Eventually, For example

設問2 下線部(1)を和訳しなさい。

○ ○

設問3 下線部(2)はどのようなことを指しているか、本文に即して日本語で説明しなさい。

設問4 文中①[ ]内の単語を適切な順序に並べ替えて解答欄に書きなさい。

設問5 下線部(3)を和訳しなさい。

3 次の設問に英語で答えなさい。

In general, people are living longer now. Discuss the causes of this phenomenon, providing details and examples.

平成31年度 お茶の水女子大学 文教育学部 第3年次編入学試験問題  
言語文化学科(仏語圏言語文化プログラム)

次の I(A)、I(B)、II、各問につき一枚の答案用紙を用いて答えなさい。  
(答案用紙の最初に I(A) というように記すこと。)

I. 次の各文を日本語に訳しなさい。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

(D'après Hubert Mingarelli, *La Dernière Neige*)

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

(D'après Hong Nga Canilo, *France-trotteurs*)

II. 次の文章をフランス語に訳しなさい。

フランスを観光旅行で訪れるだけでは、この国の良い面しか見ることができない。しかし長期にわたってフランス社会で生活すれば、さまざまな面が見えてくる。フランス人は概して自分たちの考え方は普遍的だと思っているが、日本人は自分たちの考え方は特殊だと思う傾向がある。このメンタリティーの違いが日本とフランスの外交の違いにもよく反映されている。

平成31年度 お茶の水女子大学 文教育学部

第3年次編入学試験問題

人間社会科学科(教育科学プログラム)

問1 教師の期待と生徒の学業達成の関連について述べた下記の英文を読んで、(1)  
～(3)の問いに答えなさい。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承ください。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

(出典) Jeanne H. Ballantine, 1983, *The Sociology of Education* より (一部改変)

【註】 bloomer; (本文では) 能力を開花させる生徒の意

self-fulfilling prophecy; 自己成就的予言

sibling; (男女の別なく) きょうだい

(1) 下線部分を日本語に訳しなさい。

(2) Robert Rosenthal and Lenore Jacobson が、仮説を検証するために、a San Francisco elementary school で行った実験を、200字以内で整理しなさい。

(3) 現代日本の学校教育において、生徒の行動等に関する教師の期待に影響する要因として、  
どのようなものが重要か。波線部分を参照しながら、あなたの考えを200字以内で述べなさい。



問2 オーストリアの言語哲学者である、ウィトゲンシュタインの「アスペクト知覚の変化」論について論じる文章を読み、設問に答えなさい。

アスペクトの変化の体験とは、知覚している対象自体には何の変化もないにもかかわらず、それでもある意味では変化している、という体験である。「実際、アスペクトの変化の表現とは、一致しつつ似ていないことの表現にほかならない」。すなわち、「同じだ——そして、にもかかわらず同じではない」という矛盾めいた事態に対する驚きを含む体験が、アスペクトの変化の体験だということである。

この体験を別の仕方では表現するならば、何かを別の何かとして知覚することの体験だとも言えるだろう。たとえば、以前は無意味な記号列として見ていた「むつごい」を、自分はいま有意義な言葉として見ている、という体験である。それゆえ、既知の言葉であっても、「かてい」という記号列を「家庭」という意味で捉えるとか、別の「仮定」という意味で捉えるということも、ウィトゲンシュタインはアスペクトの変化の体験の一種に数え入れている。

また、アスペクトの変化の体験には幾ばくか驚きの要素が入っていることから明らかのように、我が身に不意に訪れるものという特徴がある。もちろん、たとえば「clout」という英単語を学ぶ例において、英和辞典や英英辞典を引いて調べてみるというのは自分の意志で行っていることである。しかし、実際に「clout」の感触が分かってくるというのは、まさしく自分の意のままにならない体験である。

それからもうひとつ、この種の体験の重要な特徴として挙げられるのは、それが文字通り束の間の体験だということである。「むつごい」や「clout」といった言葉の表情を掴んだ後、我々はそれを常に意識しているわけではない。我々は馴染みの言葉に対して生き生きとした感触を感じ続けているわけではないのである。また、我々がいま馴染んでいる言葉の多くはそもそもそうしたアスペクト変化の体験を経由して習得したものではない。

このように、アスペクトの変化の体験が、特殊な状況下で時折ふと訪れる束の間の体験であるとするなら、言葉に関してこの種の体験をすることにはいったいいかなる重要性があるのだろうか。この種の体験が織り込まれたかたちの〈言葉の理解〉というものは、言葉を理解すること一般にとって何か重要なものと言えるのだろうか。

ウィトゲンシュタインは次のように問うことによって、この問題に接近しようとしている。すなわち、アスペクトの変化の体験をすることが決してできない——これを彼は「アスペクト盲」と名づける——という属性をもつ人を想定し、その人が生活のなかで何を失うことになるのか、と問うのである。

まず注意すべき点は、ウィトゲンシュタインがここで想定している「アスペクト盲」とは、ものの特定のアスペクトを知覚できないことではない、ということである。アスペクト盲の人は、たとえば「むつごい」という言葉が無意味な記号列として見ることができる。また、たとえば讃岐地方に育ち、この言葉に自然と馴染んできたのであれば、あるときは「この料理はむつごいね」と語ることができるし、別のときは他人が「あの顔はちょっとむつごい」と語ったときも、その意味を理解できる。その人にできないのはただ、「むつごい」という言葉の感じを掴む体験をすることや、あるいは、「いま自分は『むつごい』を『油っぽい』という意味で理解している」とか「いまは『くどい』という意味で理解している」と自覚することだけである（したがって、他人からすれば、アスペクト盲の人について、「いま彼は『むつごい』を『油っぽい』として理解している」と言うことは普通にできる。）

つまり、ここで想定されているアスペクト盲の人は、ものを見たり、聞いたり、色の区別

をつけたりすることはできる。その意味で、知覚に障害や異常があるわけではない。また、絶対音感をもっていることすらありうるだろう。では、アスペクト盲の人は実際のところ何を失っていることになるのだろうか。アスペクト盲の人の生活や個々の実践は、我々のそれとどう違うが出てくるのだろうか。ウィトゲンシュタイン自身は次のように問うている。

「アスペクト盲」という概念の重要性は、アスペクトを見ることと言葉の意味を体験することの類縁性にある。なぜなら、「言葉の意味を体験しない人には何が欠けているのか」ということを我々は問いたいからである。

たとえば、『かてい』という言葉を使い、仮定を意味せよ」とか、『やく』という言葉の名詞〔訳〕としてではなく動詞〔焼く〕として言え」ということが何を意味するかが分からない人がいるとすれば、その人には何が欠けていることになるのか。——あるいはまた、この言葉を十回繰り返し発すると意味をなくし、単なる音響になってしまうということが理解できないならば、その人には何が欠けていたことになるのだろうか。

これまで「家庭」を意味していた言葉「かてい」が、同じ音声（記号）でありながら、いまは「仮定」を意味しているということを、アスペクト盲の人は理解できない。また、その人は、〈言葉を繰り返し発していると意味をなくし、単なる音響になってしまう〉といったゲシュタルト崩壊の現象も理解できないし、逆に、〈単なる音響が意味をもち、言葉として立ち上がってくる〉というゲシュタルト構築の現象も理解できない。

それゆえ、ウィトゲンシュタインは「アスペクト盲」のことを、別の箇所では「<sup>ゲシュタルト</sup>かたち盲」と呼んだり、あるいは「意味盲」とも呼んでいる。言葉の<sup>ゲシュタルト</sup>かたちが崩れて意味を失う体験も、言葉が<sup>ゲシュタルト</sup>かたちを成して意味をもつ体験も、その人はできないからである。

ともあれ、そうしたアスペクト盲（<sup>ゲシュタルト</sup>かたち盲、意味盲）の人には、いったい何が欠けていることになるのか。生活のなかでどのような困難に見舞われるのだろうか。繰り返すように、ウィトゲンシュタインが「アスペクト盲」を想定する思考実験を行う主眼はそこにある。

（古田徹也著『言葉の魂の哲学』、講談社、2018年より。一部改編）

註：アスペクト知覚：反転図形などに見られるように、対象の相貌を特定の視点から知覚すること。ウィトゲンシュタインが「哲学探究」第二部において考察したことで知られる。

設問1 アスペクト盲の人がいるとして、その人が失っているものは何ですか。

設問2 他者存在が、アスペクトの変化に果たしうる役割について、あなたが考えるところを論じなさい。

設問3 「アスペクト知覚の変化」論から得られる教育についての着想に関して、あなたが考えるところを200字以内で論じなさい。

平成 31 年度 お茶の水女子大学 文教育学部 第3年次編入学試験問題  
人間社会科学科(社会学プログラム)

1. 2. 3. の解答は、それぞれ別の答案用紙に、問題番号を明記して記入すること。

1. 日本の企業社会における人々の働き方についての問題点や改革の課題について社会学的に論じなさい。
2. 次の英文①と②の全文を日本語に訳しなさい。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承ください。

出典： Ridge, Tess, and Sharon Wright(eds.), 2008, *Understanding Inequality, Poverty and Wealth: Policies and Prospects*,  
Bristol: The Policy Press, pp. 1-4.

3. 次の英文を読んで、(1)～(3)の問いに答えなさい。

この部分に記載されている文章については、  
著作権法上の問題から掲載することが  
できませんので、ご了承願います。

出典： Griswold, Wendy, [1994]2004, *Cultures and Societies in a Changing World*, Second Edition,  
Thousand Oaks, California: Pine Forge Press, pp. 3-4.

- (1) 下線部① *four things* の内容について、それぞれどう書かれていますか。日本語で答えなさい。
- (2) 下線部② *five meanings* とありますが、5 番目に加わったものについてどう説明されていますか。日本語で答えなさい。
- (3) 下線部③ *two schools of thought* とは何を指しますか。日本語で答えなさい。